

連載1年記念特別番外編

祝！連載1年達成！おめでとう～（誰も言ってくれないので自分で）

ファンファーレが欲しいところですネ。

指揮ジョン・ウィリアムス、演奏ボストン・フィルハーモニー、ロス・エンジェルス・オリンピック・ファンファーレがいいな～ついでに花火も欲しいな、クラッカーでもいいけど。あと美女に花束を頂いて・・・

「大変でしたね。よくがんばった。あんたは偉い！来月から給料を倍にしてあげよう。」

（これも誰も言ってくれないので。でもほんとに誰も何も言ってくれないな～）

冗談はさておき、皆さんに少しでも興味を持っていただけるのならと始めた訳ですが、悪戦苦闘の日々で、締め切りに追われ、また自分の文章能力の無さに打ちのめされながらもなんとか1年も続き、本人が一番驚いています。

（正直言って半年も続けばOKと言う感じでした。）

毎回毎回、非常に幼稚な文面で恥じをさらしておりますが（大体、国語がなくてない。日本語が分かってない。国語の授業嫌いだったからな～）、

「HP見てますよ。」と言う数少ない暖かい声だけを励みに、続けて参りました。

感謝しております。（もし、「あなた」の声援がなかったら、間違いなく、人知れず、あっさり終わってます。今気が付きましたけど、結局、私がPOWERをもらっているんですネ。ホントにありがとう。）

さて、この公式HPは昨年7月に開設されました。

「音楽隊員の声」と言うコーナーもその時から有ります。

でも私の「楽長の声・ガンバレ、消防音楽隊！」だけは翌8月スタートになっています。お気づきでしたか？

実は、全くのプライベートの話なんですけど、昨年7月はスイスのモントルー・ジャズ・フェスティバルに行く事になっておりましたので、完全に気持ちがそちらに向いていて、HPの事まで気が回らなかったんです。

今回「連載1年記念特別番外編」として、HPの本旨から少し(?)外れてしまいましたが、大きく「音楽」関係で捕らえて頂くつもりで、その時の出来事をお話してみます。

どうぞお付き合い下さい。

AT MONTREUX JAZZ FESTIVAL part 1

以前このHPでもお話したことが有りますが、私は趣味でドラムを今も続けております。

最近も新しいドラムセット(1BD、5TT、7シンバル仕様で、めちゃ巨大。

でもいい音してます。)を購入したところです。

自宅にもエレキドラムをフルセットで組んであり、いつでも叩ける状態にあります。

しかしこれが全く上達しないのでホント情けないです。

巷にはいろいろな専門誌が有るように、ドラムに関するものもあります。

私の知るうちでは多分国内唯一の専門誌で、(仮称)立冬ミュージック社(以下' R社')の「ドラムマガジン」と言う月刊誌です。

創刊当初は季刊誌で年4回しか発売されておらず、一旦買いそびれると書店を探し回らなければなりませんでした。

手に入れたら入れたで、次号発売までの3ヶ月間の間、ホントにハシからハシまで、広告の細かい記述まで目を通してしまうほど時間が空いたものです。

今でも購読を続けているのですが、今年の6月号に「読者ご招待」の告知がありました。

世界的なシンバル・メーカー(仮称)自留じゃん(以下' Z社')が主催し、毎回世界のトップドラマーを集めていろいろな国で開催されている催し「自留じゃん・ディ」が、同社の創業375周年を記念して、世界3大ジャズ・フェスティバルのひとつ「モントルー・ジャズ・フェスティバル」の1プログラムとして行われる事になりました。

このスペシャルイベントに日本から2名だけを無料招待するという企画です。抽選ではなく、文章選考で決められ、帰国後現地レポートや感想文を提出、記事にするとする条件でした。

旅程は7月10日(土)成田から出国、7月14日(水)帰国と言う現地3泊の強行軍です。

「へー。たった2名か。モントルーってどこにあんのかな？スイスってジュネーブの国連本部と「アルプスの少女ハイジ」とエベレストしか知らないな。」

てなぐあいで、あまり真剣に考えてなかったんです。

これが6月号発売日の5月13日の事。その後忙しくて、ほとんど全くこの雑誌を開く時間がなかったのですが、応募締め切り6月4日の前日の3日の夜、なんとなくポツカリ時間が空いて、「買ったまま読んでなかったな～」と読み返し「応募してみようかな！」と、そこから応募文章を書く事になりました。

「どうせ選ばれる事はないだろうけど、応募してみないと分からないし、宝くじも買わないと当たらないんだから、ダメモトでやってみよう。」

真剣に応募された方々には悪いんですが、締め切り日に投函しました。

(当日消印有功だったのもラッキーでした。)そして2週間後の6月18日、(仮称)矢魔葉ミュージックトレーディング社(以下' Y社')の高沢さんと言う方から電話

がかかってきました。

「河井さんですね！モントルー行ってもらいます。」

こんな事ってあるんだ～と感心してしまいました。

人の強運を聞く事は、今までにもたくさん有ったんですが、まさか自分が選ばれるとは。

出国の日まで丁度3週間。既に期限切れになっているパスポートを申請したり、モントルージャズフェスのHPにアクセスして予習したり、出演アーティストの事を調べたり、よく聞く事ですが、用意の時既に旅が始まっていると実感する日々でした。

出国は7月10日(土)成田空港に朝8時集合のため、前日に東京入りして前泊する事にしました。

モントルーへは電話をくれたY社の高沢さん、もう一人の招待者と男3名で向かう事になりました。私以外は東京在住なのですが、私が前泊すると言い出したからか、全員同じホテルに前泊する事になりました。

「じゃ、前日ホテルで合いましょう。」

「あの～、友達と会いますので、出発当日の朝、ホテルのロビーでよろしいですか？」

私だけ当日顔合わせと言うことになりました。

さて、7月9日、出国前日は金曜日でしたので午前中は音楽隊の練習にちゃんと出席してから、「のぞみ」に飛び乗り、水天宮のエアターミナルシティー近くのホテルにチェックイン。ここだと明日が楽なんです。

エアターミナルから成田直行ですから。部屋でシャワーを浴びてから、待ちあわせ場所の横浜まで移動。

20年来の親友2人と再会。その後、渋谷に移動して飲み直し。ホテルに戻ったのは12時を軽く回ったぐらいだったかな？よく憶えてません。

シャワーしてベットへ。酔ってるのですぐに眠れると思ったら気が立っているのでしょうか、3時になり、4時になり、とうとう一睡もしませんでした。

ガラにもなく興奮していたのでしょうか。

カーテンを開けると、気持ちよいほどの晴天。

寝不足の自分には少々きついんですが、寝不足のおかげで、機内で眠れるかな？

(実は飛行機では今まで眠れた事がないんです。)

7時ロビー集合。軽く挨拶してさっそく成田へ。

リムジンバスの中で、やっと自己紹介と言う感じ。

出国手続き後、バタバタと搭乗時間に。

フランクフルト空港でトランジット、ジュネーブ空港からモントルー入りです。

案の定、機内では眠れませんでした。

フランクフルト空港は、その巨大さで有名なところだそうです。

(確かにデッカイ)ここまでは成田からの日本人の方々が居たのですか、乗り換え待ちのうちにほとんど東洋人の姿が見えなくなりました。

空港職員に搭乗ゲートを確認してから我々3人は、待ち合わせ時間を決めて自由行動。

自分は免税店をブラブラ。換金レートを確認すると少し高め。まー今荷物を増やす事もないので何も買いませんでした。

3人時間どおりに合流。搭乗アナウンスがなかなかないので、先ほどの空港係員に再び確認すると、悪びれた雰囲気もなく「ゲート変更になり、だいぶ前から搭乗手続きしています。」とおっしゃる。何もアナウンスなかったのに。「ホントにいいかげんなんだから！」日本人3人が同時に同じ事を言いました。

フライト時間ギリギリで搭乗。今度は、飛行機がなかなか動かない。

「どうなってるん？」イライラ。

結局、予定時間から約1時間遅れでフライトです。

やっとジュネーブ空港に到着、初ヨーロッパの私は、簡単でもある程度の入国審査が有るものと思ってましたが、完全に裏切られました。パスポートの写真のページを、顔の横にもって入国審査官のゲートを通すだけ。審査時間約1秒。ないのも一緒。

「なんじゃこりゃ。」

さてさて、Y社の高沢さんがキョロキョロして落ち着きがない。

尋ねるとZ社のスイス・輸入代理店の「イブス」と言う人が迎えに来る事になっているのに、姿が見えないらしい。

「メール送ったのにな〜。」(ご存知のように連絡は、Eメールが主流です。特に時差の有る海外の人とはとても便利。)私も探そうと思い「どんな人ですか？」と尋ねると、「世界中の輸入代理店で一番いいかげんな奴です。」と笑いながら言ってます。結構仲良さそうです。

携帯電話もつながらず、30分程待ちましたが、諦めて鉄道でモントルーに向かう事にしました。

やっと地べたに降りたので風景が分かりました。

スイスとフランスの国境にある「レマン湖」に面して、ジュネーブもモントルーもあります。

線路沿いの道路を走る車は、日本産車と見間違えるほど外観が良く似ています。

約40分、モントルー駅に降りました。

思っていたより小さな駅でした。

(逆かな? かってに巨大ステーションを想像していただけですね。)

我々の宿は「ホテル・マジェスティック」。モントルー駅と駅前通りを挟んで向かい側です。100年以上の歴史を持つ由緒正しいホテルらしいです。

(それって古いだけちゃうの?)

とにかくチェックインして、部屋でシャワーして、横になりたい。

もうヘトヘトです。

フロントに「ハロー」と声を掛けると、「ボジュール」と帰ってきました。

スイスはフランス語とドイツ語が主流です。

街の標識もフランス語とドイツ語のバイリンガル。

日本語もイマイチなのに、英語も中学1年程度の英語しか使えないのに、フランス語やドイツ語じゃお手上げです。

でもヨーロッパの人は、母国語と英語は話せるらしいので、中学1年生英語でがんばります。

3人のルームキーを渡されエレベーターに向かいます。

このホテルのエレベーターは、自分でエレベーターの扉を開けないと乗れません。木製のドアにドアノブが付いています。

最初分からなかった我々はなかなかエレベーターが開かないので乗れませんでした。

(自分で開けないと、永遠に開きません。) たまたま降りてきた人がいたので、やっと乗り方が分かり3人で苦笑い。

エレベーターに乗り込み、動き出してまたビックリ。

普通、人が乗るところは「箱」状になっていますよね。

上下、左右、前後6方向が壁のはずですが、このエレベーター上下と左右しかないんです。

つまり四角い「筒」状。うっかり壁のないところへもたれていると、上下へ体が持っていかれます。

(実際ヘトヘトの私は壁がないところにもたれていて、倒されそうになりました。)

それぞれのフロアで降りて、休むつもりでした。

最近のホテルはカードキーですが、木製の大きなキーホルダーに大きな鍵でした。

鍵穴にガチャガチャ。

なかなか開きません。少しコツが要るようです。

やっと扉が開き、ベットが目に入ります。

荷物を投げ置いて、いきなりベットに倒れ込みました。

「ふー。」っと伸びをした時、「ドンドンドン」ノックの音が。もう一人の「招待者」の人です。「河井さん、扉が開かなくて、部屋に入れなんです。」

(ハイハイ。行きます。)その人の扉を開けてあげ、再びベットに倒れ込見ました。

現地時間は現在夜の9時。まだ明るい。日本の夕方って感じです。

日本との時差はマイナス8時間。日本時間ではもう既に朝の5時頃です。

約46時間寝てません。考えられないほど古いホテルだけど、ベットは気持ちいいな~と思ったら、今度は電話が鳴り出しました。高沢さんです。

「Z社のスタッフが集まってらしいので、一緒に食事に行きましょう。今すぐロビーに来て下さい。」「ハ~~~~。」(もう動きたくない。)

「空港で待ち合わせてたイブスがロビーに来ているので、待ってますからね。」「は~い。」(仕方ないな~)

さっきのエレベーターで無事ロビーに降りると、高沢さんと大柄な(決して長身ではない。)白人男性が談笑しています。

(彼がいいかげんなイブスかー)「ジャパニーズ プライズ ウィナー」と紹介され握手。

「ヨシフミ・カワイ」だと言うと、イブスに「なんて呼べばいい?」と尋ねられます。

(滞在中この質問は何度か経験します。)とっさの事だったので「ヨシ」にしました。

大柄な白人3人の東洋人がやっと薄暗くなったモントルーの街を歩きます。

(私はもうフラフラ目眩がします。)小雨が降ってきました。

到着したのはさほど大きくもないパスタ店。でも満員の人の熱気でムンムンしてきます。(ウツ、熱気が気持ち悪い。)中2階に案内されます。

入ったとたん「オ~~、カズ~~」(高沢さんの呼び名)と大騒ぎ。

20人ほどのスタッフらしき面々がにこやかに歓迎してくれました。

(高沢さんを、ですよ)ここでは「ジャパニーズ プライズ ウィナー ヨシ~」とイブスと高沢さんが私を紹介。とたんに握手と挨拶の嵐。ドワーツと洪水のようにイギリス英語が浴びせられます。

(もっとゆっくりしゃべってくれ~)ただただ手を出されるまま握手をしていると、隣に座っていたドイツの輸入代理店ゲバ社のハンスと言う人が「今、君が握手したのはアーマード・ジルジャンだよ。」とドイツ訛りイギリス英語で(これが分かりにくいなのなんの。超難解英語)話してくれました。

エー~~~~ッ!社長じゃ~あ~りませんかー!!!驚きのあまりMr,ジルジャンの顔を見る前に、自分の手を見てしまいました。

我に返ってよく見るとMr & Mrsジルジャンが、ハンスを挟んで私と同じテーブルに居ます。完全に目が覚めました。

今回の企画は国内広告がR社、現地までの旅費がY社、そして現地費用はZ社の3社共同企画になっています。

Z社は「Zディ・アット・モントルー・ジャズ・フェスティバル」のスポンサー。
一社提供です。

Mrジルジャンと再度挨拶と握手。

もう一度ゆっくり丁寧に今回の招待にお礼を言うと「ホントに遠いところまで、良く来てくれたね。逢えて嬉しいよ。」と優しい目で歓迎してくれました。

その手は本当にシンバル職人の手。ゴツゴツしてます。**感動、感激、感涙。**
Z社について少し触れますと、世界で多分最大のシンバルのメーカーで、クラシック、ジャズ、ロック、ポップスを問わず、世界中の打楽器奏者が知っているメーカーです。

そのシンバル製品のラインナップは、他の追従を許さない程豊富で、取扱業者の人も憶えられないぐらいです。

価格帯も我々でも充分手の届く物から幅広く、実際自分の持っているシンバルは全部Z社のものです。

シンバルの歴史を語る時、他のメーカーはともかくZ社抜きでは絶対成り立ちません。

その社長は必ず「ジルジャン家」の人がなります。

Mrアーマード・ジルジャンは同社13代目の社長でこの時既に79歳。

多分ハンド・メイド・シンバルを若い頃は創っていたのでしょう。前記のようにまさしく「職人の手」でした。Mrジルジャンに逢えた事は、私にとってはハリウッド・スターと逢えたぐらいの出来事で、それだけでもスイスに来た甲斐があったと言うものです。

イギリス、ドイツ、スイス、そして日本のZ社代理店担当者達とZ社スタッフが再会を喜び合っているで、あたたかい感じがその場に溢れていて、横から見ていてこちらまで何故か嬉しくなるような気が来ました。

その中で一番うるさいのがイブスですが。ワインとビールも出ていた気がします。それとは別に、各テーブルに750mlほどのボトルが置かれています。

中身はミネラルウォーターなのですが、炭酸入りのものです。

(スイスしか分かりませんが、ヨーロッパでは「炭酸ガス入り」がミネラルウォーターの常識らしいです。結構いけましたよ。)

突然、「ドン」と、私の前に直径35cmほどの大きな皿が置かれました。

パスタ大盛り。(ウワー、誰がたべんの?)私は取皿を探してましたが、皆の前に同じ皿が置かれている事に気が付きました。

イブスが「ヨシー。食べろヨ!」と進めます。

食べれませんって!また、めっちゃ眠くなってきました。

時間は夜11時頃(日本時間で朝の7時)結局48時間寝てない。

胸悪くなってきた、寝かせてくれ～～～！

あれ？駄目だ！書ききれないぞ！予想以上に長編になってしまう。

これも連載か～？

連載1年記念特別番外編(その2)

「我々の下手な演奏でも、喜んで頂いたとき。」

非常に数少ないですが、音楽隊を続けていてこれが一番うれしいことです。先日、思いがけないことを聞きました。

管内の女子中学生の方らしいのですが、我々の消防音楽隊を見て、吹奏楽に興味を持ち、吹奏楽部に入っらしいのです。

本人からではなく伝え聞きなのですが、だからこそ本当のことなのだろうと思います。

我々のところでは、こんな話は初めてで非常に驚き、そして音楽隊をやって本当に良かったと思いました。

彼女に負けないように頑張らなくっちゃ！

(もし、ご本人が見ていたら、是非、ご連絡ください。)

さて、前回、調子に乗りすぎて話が長くなってしまい、HPの記事としては「長すぎる！」と一部不評で、お叱りを受けてしまいました。

他方、「今までとは少し違ってとても面白かった！」とお褒めのお言葉も頂きました。

いずれにせよ、連載が平行して2本になってしまい、自分で自分を窮地に追い込む結果となりました。メチャ困ってます。

いまさらやめられないので、今回からは少しハシヨッテお送りする予定ですが・・・。(第3話にならないように・・・ヤッパリなっちゃうかな～。第4話、5話にはならないように・・・もしなったら、HP製作担当スタッフの人、ゴメンな！)

AT MONTREUX JAZZ FESTIVAL Part II

48時間ぶりに眠れることになりました。

「やっと寝れる。ベットが気持ちいいな～」

スヤスヤ？スヤスヤ？？アレ？？？ 全然眠れません。

もうすぐ日本時間の朝8時。「時差ボケ」。

時差が無くても少々ボケてるのに。

世界各国からトップ・ミュージシャンが集う。

「モントルー・ジャズ・フェスティバル」は1967年に始まりました。

はじめはアマチュア・ミュージシャンのコンクール的なものだったようですが、回を重ねる度に有名なアーティストを集めるようになり、アメリカのニューポート・ジャズ・フェスティバル等と同じく世界ミュージックシーンのビックイベントになりました。

名前に付いているのは「ジャズ」ですが、その対象はロック、レゲエ、フュージョ

ンなど多種にわたります。かの有名な曲。

ブリティッシュ・ロック・バンド「ディープ・パープル」の「スモーク・オン・ザ・ウォーター」(ジャ、ジャ、ジャーってあれです。)は、この「モントルー・ジャズ・フェス」であるバンドが演奏中、電気経路のトラブルから出火、会場が炎上、全焼したらしいのですが、その光景を湖のほうから見て、「水上の煙」と言う曲名になっただけです。

少し前(?)では、「サザン・オール・スターズ」が恒例の年越しライブで演奏し、「ライブで演奏していたサザンの新曲」を教えてと、問い合わせが多数寄せられたなんて事もありました。

「モントルー・ジャズ・フェスティバル」は、過去には日本からも、ナベサダやカシオペア(どちらも大好きです。他にも出演した事のある方がいらっしやったらゴメンナサイ。)が出演し大盛況だったらしいです。単にコンサートだけではなく、周辺のテラスや野外舞台上で、ビッグバンド、ゴスペル、クリニック等、音楽がいろんな形で披露されてました。露店もたくさん、ストリート・パフォーマンスも一杯です。エスニックグッズの露店に、フレグランス・アロマ用のお香として、(仮称)魔井荷地甲の線香が並んでいて、少し違和感を感じたりしました。(さすがに「お鈴」はありませんでした。)

毎年7月の2週間続くジャズ・フェス。

今夜のステージを見てきた人たちでしょうか、駅前通りで騒いでます。

やはり眠れませんでした。

現地では、夜10時ごろやっとなり、朝4時にはもう明るくなっていました。眠れなくて頭にきたので、朝6時前に一人散歩へ。

付近をブラブラ。

8時に朝食をとります。

スイスは酪農国で、ヨーグルトとチーズが何種類も出ていました。朝食後、午後2時まで自由時間。再び今度はレマン湖畔の周辺をブラブラ。(当たり前ですが)ヨーロッパ調で町並みがきれいです。

でもあいにく日曜日なので商店は全部休み。

湖畔に立っている、ロックバンド「クイーン」のボーカル、フレディー・マーキュリーの銅像を見に行きましたが、眠くて眠くて仕方がありません。

ホテルに戻ってベットへ。やっとなりました。

爆睡です。

Z~ZZ~~ さて、2時間半程度、ほんのチョッピリ充電した後、オープンサンドの軽い昼食を済ませ、ダイブ・ウェックルのドラム・クリニックを見に行きます。

会場は満杯。

さすが超売れっ子ドラマー。

空席が無いので、会場真ん中にある通路で見ようと思っていると、まだまだ後から人が入ってきます。

後ろの人が見えるように地べた座り。床がカーペットだから大丈夫です。が、どんどん前へ押され、とうとう舞台前のだ真ん中最前列まで来てしまいました。

この時の舞台は高さ50cmほどだったのでデイブ先生に手が届く距離です。いくらなんでも近すぎ。ファン方からすればタマラナイことでしょうが、首が疲れるよ～。

(仮称)矢魔葉(こちらも以下'Y社')の萩原さんも舞台袖にスタンバイ。

通称ハギさん。

知る人ぞ知るとんでもないおじさんです。

世界中のトップドラマーと面識があり、この人の掛け声で集まり、スティーブ・ガッドを始め20人もの世界のトップドラマーを集めてドラムバトル大会を開いたりして、もしかすると、演奏する日本人アーティストより、有名な日本人になるかも知れません。

国内勤務のはずですが、約半分は海外を飛び回っています。

デイブ・ウェックルは、174cmの私より少し低くて長身ではないけど、CDジャケットのとおり、メッチャ男前。

ドラム・クリニック、スタート。

グリップやフォームの基本から4ウェイの練習のヒントまで、その都度質問がないか確認しながらの丁寧な進め方です。

Y社の新商品のデモンストレーションもあります。

が、本格的な演奏は夜までお預け。

時間どおりキッチリ終了。

非常に淡白な演奏で拍子抜けした感じでした。

終わったとたん大勢のファンが駆け寄ってましたが、マネージャーらしき人に完全ブロックされ、撃沈。誰一人として握手もサインもなし。

デイブ先生さっさと消えてしまいました。

私は後で知る事になるのですが、今夜の「Zディ」のため、メイン会場入りの時間が迫ってたので急いでたのです。

とにかくハギさんにご挨拶。

こちらを見て「お～日本から～」って感じ、しばしお話できました。

さー、いよいよ「Zディ」。

今回の企画は日本だけでなく、イギリス、フランス、ドイツ、オランダからも各国

2名ずつ計10名、同じように招待されて、モントルーに来ています。

初めて全員合流しました。

昨夜のパーティーに居たスタッフ達も続々集まってきます。

アッ、社長も要るぞ。

日本組は昨日の今日なのですぐ社長にご挨拶。

でも、他国の招待者たちは、みんな英語がちゃんと話せるので「会話」が弾んできます。

(やっぱ、中1英語では限界。きびしいです。)その辺は羨ましいです。

記念撮影後、メイン会場「マイルス・デイビス・ホール」へ。

バックステージパスをもらい、まずはレセプション会場で出演者やスタッフも交えてお食事。

舞台裏には、垂涎ものの楽器や器材がところ狭しと並んでいます。

レセプション会場にも、酪農国スイスにちなんで「牛」も様にカラーニングされた高級ドラムセットが組まれています。

ウワー、モットイナイ。アーマード社長も席につき、乾杯！まず、現れたのは、先ほどのクリニックのデイブ・ウェックル。

社長の隣で暫しの会話。次に、トリロク・グルトウの登場。手早く社長に挨拶して去っていきました。

一般的な事ですが、リハーサルは出番の逆順に行われる事が非常に多いです。

この時も逆リハのせいで、トリロクはサウンドチェックの時間でした。

今夜の先頭バッターでしたから。

最後に現れたのはマヌ・カッチュ。「スティング」のドラマーと言えばわかりやすいでしょうか。

いくつもあるテーブルを全て回って挨拶しています。

あまり喋らないけどいい人のようです。

デイブ先生は、社長の隣から移動して、モデルのような女性2人と楽しそうに話しています。

よくよく聞くと、その子たちのバストを「バズーカ、バズーカ」と言っています。

いったいなんの話や！

我々の席に、先ほどのハギさん、Y社イギリス支配人のコンさんなど日本人が集まってきました。

皆さん「やっぱり、日本語で話すと楽だな〜。」って。

ハギさんなんか、他の人は日本語が分からないからと、結構過激なボヤキをボンボン言い出します。

オイオイ。Z社のスタッフ、ティナと写真を撮っていると、ハギさん、ここぞとばかりに、英語で冷やかすもんだから(それも大声で)、同行していたティナの彼氏がムツとしていました。

ゴメンゴメン。

時刻は21時。「Zディ」のスタートです。

「マイルス・デイビス・ホール」はもうこれ以上入らない程の超満員。立ち見席も一杯です。こちらの消防法はいいのかな？なんてネ。

我々ゲストは一般客席ではなくホールのコントロールルームのような部屋から見ます。

まずは、アーマード・ジルジャン社長がステージ上からご挨拶。ヒューヒュー！1番、インド出身のトリロク・グルトウ。

女性ボーカルから始まり、徐々に盛り上がっていきます。

トリロクは初体験の私でしたが、ハートにグイグイ、大地の鼓動を感じてしまいました。

出国前に、音楽隊サックス担当の先生が共演するとのことで、イギリスの打楽器奏者エヴェニー・グレニーを聴きにいったのですが、小さめの銅鑼を手にして、鳴らしてから、水を張ったタライに沈めて音を変化させていました。

その音の変化は非常に面白かったのですが、トリロク・グルトウも全く同じ事をやっていて驚いてしまいました。

Y社イギリス支配人のコンさんの部下のボブが「エヴェニー・グレニーって言う人と、お互いに真似だと言いついてるんだ。」と教えてくれます。

日本でエヴェニー・グレニー見てきたって言うとビックリしてましたけど。緩急のついた曲が多く、ディープ・ディレイをかけたバード・ホイッスルなどを用いてドンドン幻想的な世界へ観客を引きずり込んでいました。

1時間の演奏が終了。

会場はいきなりのスタンディングオベーション。

我々さっそく楽屋へ。演奏後すぐに疲れているだろうに、ニコニコで我々の相手をしてくれます。

この人もいい人だー。さっき食べれなかったので「おなかが減った。スシ食ってくるよー。」とジョークとともに消えて行きました。

結構良く喋る陽気な人でした。

2番手、マヌ・カッチュ。

ギターのドミニク・ミラー、ベースのピノ・パラディーノのトリオです。まず、ドミニクが透き通るような音で演奏。

その後ピノが加わり、最後にマヌ。

トリロクとは違いどこか哀愁が漂うスタートでしたが、徐々に演奏は激しくなっていくます。

マヌのドラムは非常にグルーブ重視で、クールな感じでしたが、盛り上げつつドラム・ソロへ。

これがまたカッコイイ～。

ポリスやスティングの曲も数曲交え演奏終了。

これまたスタンディング・オベーション。

またまた楽屋へ。

トリロク程はしゃべりませんが、愛想はいい。

ヤッパリこの人いい人だ～。スタッフ専用のカウンターで水分補給(誤解の無いように、チャンとアルコールは避けましたよ！)、こちらも少し休憩しなくちゃもちません。

最後はディブ・ウェックル・バンド。

CDは日本でも入手が容易です。

最新アルバムの1曲目でスタート。

最初からアクセル全開。

音数だけで圧倒するのではなく表現力、グルーブに裏付けされた超ハイテクドラミング。

アルバムで聞くより、アドリブ等もあって数倍スリリングな演奏で会場もオーバーヒートギリギリに盛り上がってます。

本日のトリだけあって、演奏が終わっても拍手が全然鳴り止まない。客席は総立ちです。ディブのほうもそれにこたえてアンコール20分以上の大サービス。

さっきのお疲れ顔からは想像出来ません。

お約束のように楽屋へ。

ディブ先生お友達ミュージシャンに取り囲まれなかなか近寄れません。

時刻はもう12時を軽く回ったところ。

疲れからか急に気分が悪くなってきました。

ボブやその奥さんが「大丈夫？」と声を掛けてくれます。

「平気、平気。」でも冷や汗まで出てきて、多分顔も青かったんだろうな～。

みんなから少し離れて壁に寄りかかっていると、ダスタマン風にサングラスのいかにもヤバそうな黒人お兄ちゃんが近づいてきました。

「ヘイ、大丈夫か？いい薬をあげよう！」と言ってからスタッフルームに消えていきました。

「それ合法的な薬？違法な薬？ヤバいんちゃうの？」立ち去る訳にも行かずそこで

待っていると、お兄ちゃん戻ってきて「あげるよ！」とニコリ。

見てビックリ。

なんと今日の出演アーティストのタイムスケジュール、楽器の一覧、サウンドチェック、エフェクターやミキサー等のセッティングなどなど、ステージスタッフオンリーの打ち合わせ資料をくれました。

見るからに「ヤバ」そうなお兄ちゃん、実はメッチャいい人。

これはホントに感動もの。病は気から、治っちまった。

良く効くお薬でした。お兄ちゃん、ありがと～～。

ディブ・ウェックルとも暫しお話して引き上げました。

ホテルへ向かう途中思っていたんですが、本番前も一緒に食事してたのに、本番後の楽屋まで行って悪かったかな～？って。

まーいっか、面白かったし、社長のゲストと言う事だし許してもらおう。すごい経験させてもらっちゃったな～。

興奮の1日が終わろうとしています。

それにしても今日は眠れるでしょうか？今度はそれが心配になってきました。

アーやっぱり、来月へ続いてしまいます。なんとか次でまとめるから、みんな一怒らないでねー。